

峰崎直樹君 社会民主党の峰崎でございます。

実は、私も大臣と同じようにアメリカを二十八日から三日まで、ちょうど同じホテルに滞在するという偶然でございましたけれども、そんな関係で事前に質問を出すのが非常に慌ただしくて、科学技術庁以外の方にもきょう来ていただいていると思うんですが、二十分間という大変短い時間ですので、もしかすると時間の関係で答弁をいただかないこともあるかもしれないということで、大変申しわけないというふうに思っております。時間もありませんので、私は地元北海道の関連であります幌延問題、あるいは「もんじゅ」の問題を絡めてプルトニウムの利用計画などについてまずお聞きしてみたいと思うわけでございます。

最初に、もうこの科学技術委員会で「もんじゅ」の問題についてはかなり議論されておりますが、昨年七月に、例の新型転換炉 A T R を大間に建設する、これはたしか電事連で、民間ではちょっと手に負えない、経済的にも無理だということで、商業炉が建設中止というような事態になったやに聞いておるわけでありまして。

どうもこの十年近く、チェルノブイルからちょうど十年でございますが、それ以降原子力あるいはプルトニウムの問題をめぐって、私自身四年前からこの科学技術委員会にも参加をさせていただいているんですが、どうもこの間私ども、国際的に見てもあるいは国内で起きている出来事を見ても、この国のいわゆる原子力利用計画、平和的な利用、そういったことについてこれはやはり国民の中にも相当な不信、不満が出てきているんじゃないか。その意味でプルトニウムの利用計画も含めて、大臣、ひとつこの計画のあり方について本格的に再検討すべきじゃないかという声が根強くあると思うんですが、この点についてどのようにお考えになっていらっしゃいますか。

国務大臣（中川秀直君） いずれにしても、先ほどの質疑にもございましたけれども、資源が乏しい我が国の状況の中で将来にも責任を持ったエネルギーも確保しなきゃならぬということ、また同時に、現実三割を超える原子力発電をいたしております過程の中でも、使用済み燃料を初め放射性廃棄物というものの処理処分の問題というものが環境に対する影響負荷を極めてないようにしていかなくちゃいかぬといったようなもう一つの要請、両方から使用済み燃料を再処理してプルトニウム等を有効利用するリサイクル政策というものをとっておるわけでございます。

N E A 等の予測によりまして、核燃料自身が四十三年という埋蔵量でございます。そういった観点も含めまして、今このリサイクル政策というものは、例えば、先般私、アメリカの議会人ともいろいろ懇談をいたしました、いわゆる核不拡散という観点からこれについては慎重な米国でございますけれども、その米国でさえも、やはり一定の理解といえましょうか、ワンスルーで処分をするといっても処分地も決まっていない。また、そ

れは資源の有効利用という観点からもやはり問題がある。そういう意味で、プルサーマル等は米国も議論をすべきだという御議論が、私のお目にかかった議員の中ではむしろ過半数を超えるような感じでした。

それは一つの私の感想にすぎませんが、いずれにしても、この安全性を何よりも大前提にするということが我々の考え方であり、そしてまた平和利用というものを徹底させるということが我々のまず国の原則である、こう考えております。そして同時に、そういう上に立って初めて国民や地元の皆さんの御理解を得る、その上で基本政策というものが成り立つ、こういう順番であろう、こう考えておるわけでございます。

今度の「もんじゅ」の事故あるいはまた円卓会議等での御議論、こういうものをいろいろ積み重ねながら、その場に出てくる各界各層の幅広い御意見を柔軟に基本政策には反映させなさいかぬ、こういう観点で取り組みを始めていく、これからもその姿勢は貫いていくという気持ちで今はおります。

峰崎直樹君 そのアメリカなんです、もちろんアメリカのすべての人がそう思っているというわけじゃなくて、どうも日本はやはりプルトニウムというものを異常に持ち過ぎているんじゃないか、そういう新聞の論評なども私もよく見るわけでありまして、たしかあれはあかつき丸でプルトニウムを海上輸送したときも、全世界から日本は一体これからプルトニウムをどうしようとしているんだろうかと。その際、科学技術庁としてもプルトニウムが今どのくらいあるかということを開示する、公開をするということについてはもちろん努力をされていると思うんですが、現時点で、今どのくらいのプルトニウムを日本は持っているのか、そして、将来これはどのくらいのプルトニウムを持つことになるのか。その数字、もしわかれば教えていただきたいと思うのであります。

政府委員（岡崎俊雄君） 今後の日本のプルトニウム利用につきましては、先生御指摘のとおり、国内外の理解がなければ進み得ないということは我々も認識をしているところでございますし、その利用に当たりましては、計画に必要な量以上のプルトニウム、すなわち余剰なプルトニウムは持たないということ、したがって、今後の需給計画というものを明らかにしながら進めていくということとその基本といたしておるところでございます。

今後のプルトニウムの利用計画につきましては、さきの長期計画策定時におきましても明らかにいたしましたところでございますが、まず、一九九四年から九〇年代末、すなわち二〇〇〇年までに利用いたしますプルトニウムの量は年間約〇・六トンでございます。さらに、二〇〇〇年から二〇一〇年にかけて年間約五トン程度の利用が見込まれておるわけでございます。それに必要なプルトニウムの供給につきましては、東海の再処理工場に加えまして、先生から先ほど御指摘がございましたフランスからの返還のプルトニウムで充てていくという予定にしておるわけでございます。

今後とも、先ほど申し上げました余剰プルトニウムは持たない、あるいはその計画について明らかにし、さらに具体的に、ちょっと今数字は見当たらないわけでありましてけれども、現在所有の量につきましても、原子力白書等におきまして詳しくその都度報告していくということを進めてまいりたいと思っております。

峰崎直樹君 その数字、事前に言っておりませんでしたので、また私も原子力白書等を見たいと思っているわけではありますが、ATRもある意味では商業炉を断念すると、そして「もんじゅ」の問題も今国民から大変不信を受けている。

そうすると、我々、原子力発電というのは過渡的なエネルギーとしてそれを認めた場合、使用済み燃料というものをそのままいわゆる原発の敷地内で保管をしていく、それを再処理しないということにすれば、今北海道で大問題になっている幌延の、いわゆる高レベル廃棄物をガラス固化体にしてそしてそれを地層ですべて処分しましょうと、こういう問題も実はなくなるのではないのかというふうに思うわけでありまして。その意味でこの問題は大変大きい問題だと思っておりますので、私ども北海道の立場からすれば、むしろもうある意味ではこの原子力サイクルを少し考え直す時期に来ているんじゃないかということだけ、これはもう恐らく水かけ論になると思うので、時間もありませんからこれ以上触れません。

そこで、今度は幌延の問題なんですけど、たしかこの問題が起きたのが一九八四年ごろじゃなかったかと思いますが、この十年間どんな進展があったのか。私が見るところ、地元の自治体あるいは北海道庁も含めて、知事は交代したけれども、これは何ら進展をしていないんじゃないかと思うんです。その意味で、どのような変化があったのかということについてまずお考えをお聞きして、太当にこの間、もう地元では熱意が冷め始めているんじゃないかという声すら聞こえてくるんですが、この点は科学技術庁としてはどのようにとらえておられるでしょうか。

政府委員（岡崎俊雄君） 幌延の貯蔵工学センター構想につきましては、将来の高レベル放射性廃棄物の処分に至ります処理処分を安全かつ適初に行うための研究開発施設として大変重要なものであるということをお願いをしてきたわけでございます。

先生御指摘のとおり、十数年来、大変いろんな場面がございました。一番最初は昭和五十六年に幌延町からの立地の要請から始まったわけでありましてけれども、この間、幌延町あるいは周辺の町村あるいは北海道議会におきますいろんな議論がなされたわけでございますし、今御指摘のとおり、昨年には知事さんがおかわりになったという状況もございます。そういった状況の中で、必ずしも進展はしていないというか、地元の町を初め北海道の方に大変な御議論をいただきあるいは御心配をおかけしてきているまま十年以上経過したことは事実でございます。

加えまして、新しくなられた堀知事ももちろんこの幌延の計画そのものの白紙撤回は求められておられるわけでございますけれども、他方、高レベル廃棄物処理処分の研究につ

いての御理解もいただいておりますと我々は認識しておりますとでございます。

したがって、今後ぜひ積極的な対話という活動を通じながら、単に幌延町だけではなくて広く北海道の方々の理解を得るよう努力を進めていくことが大事なことでないかと認識しております。

峰崎直樹君 知事が理解を示したとちょっと

おっしゃってましたから、私ももう一回、知事ではありませんから、確かめてみます。

そこで、今年度の平成八年度貯蔵工学センターの関連予算の中で、ちょっとマイナーな小さなところですから、なかなか皆さんの目に触れていないところかもしれませんが、その中で重要電源立地推進対策補助金というのがあります。昨年度は八千万、ことしも八千万です。これ、実際去年はどのくらい使われたんですか。

それから、ことしは動燃事業団の計上分で地元との対話の充実と称して六千八百万円の、これは新規の予算ですね。これは地元との対話の充実を図るために使うんだとおっしゃっている。

合わせて一億四千万円ですか、もっともまだまだほかにもあるわけではありますが、これは何のために使われるのだろうか。もう十数年たってぐずぐずしていて、原子力をめぐる情勢も先ほど申し上げたように大きく変わっている中で、ここまでやって無理だったらもうそろそろ、十数年たってなおかつまだ新規にされるというのは、私どももちょっと理解しかねるところがあるんです。

その関連で、昨年七月ごろだったでしょうか、岐阜県の瑞浪市に高レベル放射性廃棄物処理施設の超深地層研究所、これの建設計画が新聞に発表されておりました。これは一体どうなっているのか。幌延の皆さんは、もしかすると幌延はもうなくなって、候補地にこちらの方が大体決まっていくのかなというような声も聞いているんですが、このあたりの状況についてお聞きをすれば、恐らくもう時間がないんじゃないかと思しますので、これを最後にしたいと思います。

政府委員（岡崎俊雄君） まず、予算の点でございます。

御指摘のとおり、重要電源等立地推進対策補助金という形で八千万円計上させていただいておりますけれども、これは地元の公共団体が行われます広報活動に対する補助金という形で予定をさせていただいておりますとでございます。幌延町が計画しておられましたいろんな広報活動に対する補助金を計上し、あるいは七年度も執行されておるところでございます。

加えまして、動燃事業団が計画しております地元との対話の充実で六千八百万円を今年度予定させていただいておりますけれども、これは従来のいわゆる一方的な広報ということではなくて、むしろ積極的に地元の方々の御意見をちょうだいし対話していくことによって、この幌延問題だけではなくて、広く廃棄物全体あるいはエネルギーの

問題全体について対話を深めていくための予算をぜひ計上させていただきたいと思っております。

いずれにしても、今後とも地元との十分な協議を踏まえながら、有意義な会議ができるように努力をしていくべきものと認識をいたしております。

さらに、先生から岐阜県の瑞浪市に計画しております超深地層研究所について御指摘がございました。

この点につきましては、この研究施設そのものは、高レベル放射性廃棄物の地層処分の研究開発の基礎となります深い地層のいろんな科学的な研究を行うための施設として動燃事業団が計画しておりますところでございます。地下数百メートルから千メートル程度に至る地層のいろんな活動をぜひ解明していきたいと思っております。こういった超深地層の研究施設につきましては、地層処分研究に共通の研究基盤となる施設として長期計画でも大変重要な位置づけが与えられております。単に地層処分だけではなくて、学術的研究にも非常に役に立つということでもございます。

加えまして、こういった超深地層研究施設というものが我が国の地質の特性等を考慮いたしまして複数の設置が期待をされております。ちなみに、岐阜県のこの地域の地質とそれから北海道の幌延で予定をさせていただいております地層というのは、堆積岩と花岡岩という、地質が大きく異なるところでございますので、ぜひ私どもとしては複数のこういった研究施設によります活動によって、将来の地層処分が安全に行えるかどうかということの見極めをしていく上で大変重要な施設であろう、このように認識しております。

この瑞浪の研究所につきましては、昨年末、地元の県でありますとか市でありますとか、そういった方々との基本的な協定がなされたわけでございます。今後の具体的な研究施設の設置に当たりましては、もちろん地元の方々と十分な対話を図りながら、理解を深めながら進めていくべきものと認識をいたしております。

峰崎直樹君 ちょっとやはり不十分だなと思うんです。要するに、昨年八千万用意して、これ八千万全部使い切ったかどうか、それが一つ。どうも非常に不十分です。事前に質問通告しておりませんでしたから、もし今ちょっと確かめられないといえれば後で結構でございます。

それからもう一つ関連して、今から二年ぐらい前、まだ科学技術庁長官が江田五月さんのころだと思うんですが、そのころ実は、幌延は核を抜いて、核抜きでこの研究施設をつくらうというような新聞報道がなされたことがあるんですが、こういうことを検討したことがあるのかどうか。その点含めて、これを最後にして質問を終わりたいと思います。

政府委員（岡崎俊雄君） まず、第一点目の八千万円の重要電源等立地推進対策補助金につきましては、具体的な詳細な額につきましては七年度について今資料を持っております。

せんけれども、おおよそこの八千万近い金額が使われたと認識をいたしております。

峰崎直樹君 幌延だけで。

政府委員（岡崎俊雄君） 幌延だけでございます。

第二点目につきましては、もちろんこの貯蔵工学センターの進め方についていろんな観点から検討は進めてきておるところでございます。もちろん江田大臣の当時におきましてもいろんな検討はなされたわけでありましてけれども、最終的に具体的な成案を得るには至らなかったということを御報告申し上げたいと思います。

峰崎直樹君 ありがとうございました。